
水晶盤のゲーム

エーシュルング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水晶盤のゲーム

【Nコード】

N2020J

【作者名】

エーシュルング

【あらすじ】

1984年。

謎の組織PCOに牛耳られた日本と、ラディカルな解放戦線の戦いは下火へとなりつつあった。解放派のわずかな生き残りは、起死回生をかけて古代文明の遺産の発掘に取りかかった。

1 寒い国

1984年

PCO日本共和国の北方に位置する島 樺太

北海道のさらなる北、樺太の地。

日は沈んだ。

だが、世界は眠っていない。

空気は叫んでいる。

戦いは続いている。

樹木に寄りかかる人間の姿があった。針葉樹の幹の、とげとげした感触も気にならないのか、まるで木と一体化したように、微動だにしない。

くたびれ果てた男だった。目を閉じている。

名はアメフといった。

手入れしていない髭をぼつぼつと生やし、服は泥にまみれて元の色が分からない。

ちよつと見ただけでは、アメフは敗残兵に見えるだろう。

事実、その通りだ。

だが、正規の敗残兵とは違う。アメフは傭兵だ。血も涙もないしたたかさ、という点で、正規兵は傭兵に遠く及ばない。

樺太。ひどい世界だ。

腹は減っているし、痛みも去らない。煙草一本くれるのなら、喜

んで悪魔に魂でもくれてやりたい。

だが、ここ数日、物事が改善することはなかった。

幸い、敵はいくらでもいる。この惨めな状況を作り出した奴らに、代価を支払わせてやる。

ささやかな抵抗だ。

前方の茂みで、かすかな音がした。

見事に気配を消していやがる。

アメフはゆつくりと目を開いた。平らな瞳が、どんよりと夜を映し出す。

両腕が持ち上がり、鉄砲の筒先が茂みを向いた。

出てこい、日本兵。PCOの手先。同志の殺害者。

アメフの牙は鋭いぞ。

アメフの顔には、文字通り刻まれた傷があり、片耳はもはやない。だが、それらは古い傷で、射撃の障害にはならない。

問題は、先日、大円筋と三角筋の間に撃ち込まれた奴で、まだ弾も入っている。

嫌な感触が腕を伝う。歯を食いしばって、それを無視した。

さあ、出てこい。

ゆつくりと引き金に指を当てる。殺気を悟られないように、意識を拡散させてある。

撃った後、すぐに反撃が来るだろう。動き出せるように、足の筋肉を緊張させる。

のそりと、目標が歩み出てくる。大柄だ。

こちらに気付いた。

もう遅い。指は引き金を

引かなかった。

敵ではない。

それは黒い瞳でアメフを睥睨していた。

そして、堂々と元来た道を帰っていく。

アメフは深々と息を吐いた。
ヘラジカとは。

北海道では狩り尽くされて、もういない大型獣。
だが、ここは樺太。世界の果て。文明世界の常識は通用しない。
俺はそのことを肝に銘じなければならぬ。アメフは思った。常識は通用しない。

背後で草むらが、ばりばり音をたてた。静寂に慣れたアメフの耳には、雷音のように聞こえた。

さつと振り向き、鉄砲を構える。

「アメフ？ 傭兵アメフ、どこにいる？」

アメフは舌打ちして、鉄砲を下ろした。

「俺はここだ。口を閉じろ、ソウ。樺太中の日本軍を呼び寄せるつもりか？」

小柄な少年が歩み出てきた。軍人ではない、華奢な見た目だ。

「何かいたのか、アメフ？」

アメフは首を振った。

まだ、日本兵はここまで追ってきていない。

時間はある。わずかだが。

野外に関して経験豊かで、多くの国について見聞きしているアメフにとつても、うっそうたる森と岩の転がる荒れ地に覆われしこの地は、過酷な世界との言葉で表現するにふさわしかった。

「だめだな」

アメフはとがった声で言った。森は青紫色の闇に包まれ、湿気が冷たくべたついた。

二つのランタンが弱々しくあたりを照らしている。アメフは明かりに反対だったが、ソウは発掘に必要なだと主張した。

素晴らしい。森のどこからでも、敵は俺たちを狙撃できるわけだ。母方から受け継いだヤークト人の血のおかげで、寒さは気になら

なかった。それでも肩に背負った鉄砲が重く、傷にひびいた。歩く度に、まるで目に見えないかぎ爪に掴まれてもしているかのように痛みが走る。

「暗過ぎるし、寒さも厳しい……。うまくいくとは思えない」

「いや、そいつはどうかな」

少し前を歩く発掘屋のソウが、彼特有の楽観的な表情で振り返った。

逃避行の道連れである、この痩せた若い発掘屋には謎が多かった。彼の黒くてカールした髪、浅黒い肌というのはアジア南方の民のようだが、顔つきは地中海風だ。

彼の振る舞いにはどこかの国民へのつながりといったものを感じさせない。国を奪われた民の子だろう。

年齢は二十を越えていないようだが、妙な生意気そうな喋り方と浮かべる笑みが気に食わなかった。

「どつちにしたって、大胆にやってのけるしか無いよ。僕の探している物を掘り出す他に、日本の軍隊から逃れる方法なんて無いのだし」

ソウは右腕を水平に構えて、指から糸を垂らした。

儀式的な雰囲気満ちた重々しい動きだ。

糸の先にぶら下がる硬貨がゆっくりと揺れる。ダウジングとかいう、発掘屋達が使っ非科学的な手法らしい。

「どうやらこっちの方らしい」

ソウは自信なげに道無き道をかき分けて進む。アメフは渋い顔でついていった。

本当に、事態を打開するアイテムなど見つかるのだろうか。

アメフに発掘屋の知り合いは少なく、友人に至ると皆無だ。

理由ははっきり自覚していた。アメフの耳には発掘屋の言葉は全て戯言に聞こえるのだ。真顔で「発掘は芸術だ！」だとか言って一生を土を掘ることに費やし、古代のがらくたや化石化した機械を掘

り出す男女を、正気な人間とは判別していなかった。

だが、同行者を選べる幸運には恵まれていなく、不本意ながらこの発掘屋の力を借りないことには万事休すだ。

日本軍はそこら中にいる。アメフは、生きて樺太を脱出する手を思いつけなかった。

樺太の森はただただ不気味でどこまでも広がっていた。ヒュウウウと奇妙な人の心を不安にさせる音が森の奥から響いて来た。

「悪霊の声が聞こえる」

アメフはつぶやいた。昔、中国で聞いた迷信が心に浮かぶ。

「なに、ただの風の音さ」

ソウは平然とした声を装っている。だが、そびえ立つ樹々の節くれ立ったその姿は邪悪な天蓋のようで、彼を落ち着かない気分にかけているに違いない。

臆病な人種だ。

無表情にそう思うアメフの前で、ソウは気合いを入れ直してダウジングに集中し直した。

ソウは左手に山刀を振って絡み付く草木をなぎはらっていく。アメフは鉄砲を持っているが、ソウが持つのはそれとシャベルだけだ。このうっそうとした森で現れるかもしれないオオカミやクマ、パンダ、その他凶悪な野生動物が襲ってきたときの状況をアメフはイメージしなければならなかった。

いかにして発掘屋と自分双方を守りながら戦うか。

残弾数は少ない。

一昨日、防備不十分な日本軍の搜索部隊の一隊を襲って大打撃を与え、銃弾と手榴弾で死と破壊をばらまいた。だが、その代わりに野生動物に対してさえ、残弾数を気にしなければならぬほど弾薬が減ってしまった。手榴弾に至っては残り一発。

樺太に日本兵はあと、どれくらい残っているのだろう。一万人か。十万人か。

補給の望めない一人の傭兵VSアジア東部の軍事国家の軍団とい

うわけだ。

目の前の頼りない発掘屋をなんとか利用して、この絶望的な状況を打開するしかない。

ソウが探しているものがなんであれ、素早く目的の物を見つけなければならなかった。

それにしても、異様な森だ。

奥に進むにつれ闇は濃くなり、いつしかアメフでさえ落ち着かなくなっていく。

寒さは体の奥まで入り込もうとしてくる。ソウはマントをしつかり体に巻き付け、それを阻もうと試みていた。吐息は白いもやとなつてばやけていく。ソウはその中に己の魂まで含まれていて、呼吸をする度に命が短くなっていくという幻想にとりつかれていることをつぶやいた。それは聞いたことのない迷信だ。

だが、そのとき。

とりとめのない考えは、ダウジングの硬貨が今までの揺れとは違う、ヒステリックな踊りを始めるに及んで忘却へと追いやられた。

「ここだ」

ソウの黒炭の様な目が光った。二人はシャベルを握った。

「ここまで来てシャベルの先をぎざぎざにしただけとあっちゃ笑い者だぜ」

「地面が凍る程の気温じゃないだろ、アメフ。地面にはゆっくりと熱が伝わるのだから」

二人はザクザク掘った。だがアメフにとっては慣れない動作とあって動きは鈍かった。そしてソウは非力だった。

作業は進んでいる様子すら見せない。

やがてソウは荒い息をついた。

「硬い土だ。疲れるものだね、こりゃ？」

「なまけんじゃねえよ、ソウ」

ソウは聞こえないふりをして水筒の冷めたお茶を注いだ。

「ゆつくりくつろいでいて野生の」

「野生のオラウータンが出ると脅したって無駄だぞ。僕はお茶を飲む」

「俺の知る限り樺太にオラウータンはいない。それより日本兵に見つかるとは思えない。俺が殺した連中の同僚が、血眼になってこの辺を探しまわってるはずだ」

「午前三時だぞ。日本兵は布団の中さ、傭兵」

「じゃあオオカミだ。血に飢えたオオカミがこういう森には」

ウオオーンと、暗黒の森を野獣の雄叫びが満たし、さらに何頭かが同様に鳴き声を上げた。アメフは舌打ちした。ソウの顔が青ざめた。二人は顔を見合わせると、次の瞬間シャベルをひつつかみ、掘りまくる。そのスピードはさっきの十倍にも匹敵した。

2 鋼の軍団

樺太南部大泊。日本軍本拠地。

カマクラ將軍は名将らしい、石碑のようなどっしりとした態度の男だが、その全身に鋭く力がみなぎっている。クノツソス宮殿にいるらしいミノタウロスがその名だけで敵をひるますのと同様、カマクラ將軍にもなんとというか、常人離れした迫力というものが備わっていた。

彼は左腕でドイツ製の懐中時計をとって時間を確かめた。千もの精巧なねじや歯車で作られたこれは、一年に一度巻くだけで、正確無比に時間を刻んだ。だが、それほどのものを作る技術を持っていたにもかかわらず、すでにドイツという名の国はない。ヨーロッパでの絶え間ない闘争は国を倒し、文明を根こそぎにしてしまうのに十分な威力を誇ったのだ。

油断ならない時代になったものだとかマクラ將軍は思った。

黒檀の箱を開き、中から紙巻きを手にとった。まずい国産ではなく、南米からの希少なものだ。

それを手にもてあそびながら彼の部屋の南にもうけられた大窓へと歩み寄る。歩く度に腰のサーベルが金属的な音を立てた。カマクラ將軍は金色のライターをとりだし、紙巻きに火をつけ、そして深々と煙を吸い込んだ。

眼下ではカマクラ將軍の手足となって動く軍隊が、次の戦に備えて静かに待機している。

「イズキ中佐、まいりました」

廊下の方から静かな声が聞こえた。

「入れ」

木製の堂々とした扉が開き、イズキ中佐がきびきびと入ってくる。時間通りだ。イズキ中佐はPCO軍令本部から派遣されてきたカマクラ將軍の副官だ。常につまらなそうな顔をした痩せぎすの男だ

つたが、カマクラ將軍の求める仕事は果たしていた。

「海岸から全ての物資を大泊に運び込みました。敵対勢力である解放派の遺体、遺棄兵器へ検分チームを派遣。そのうち気の利いた報告をよこすはずです」

「海軍どもはどうした？」

「彼らは我々の忍耐を試してやろうとでもいうかのように、眠っている部下達の隣で樺太内陸へと艦砲射撃を行い、やがて割当弾薬を消費したとのことで、間宮海峡へと進んでいきました。部下達は割当睡眠を消費できなかったことに関してぶつくさ言ってます」

「うむ」

「報告は以上です。ところで本土から伝令が来たようですね」

「その通りだ。よく分かったな？」

「あの、赤と黄緑色のしましま模様に塗装された特使機は目立つんですよ。たぶん、ここから長野県の間人、全てが特使機に気付いているのでしょね」

カマクラ將軍はゆっくりとうなずく。日本軍特使機が派手な塗装をほどこされている理由は、てんとう虫が目立つ出で立ちなのとまったく同じ、警戒色。伝えんとしているメッセージは明白だった。

『これを撃ち落としたり、その代価は高いものとなるぞ』、だ。

「それで、伝令はなんと？」

カマクラ將軍はイズキ中佐の問いには答えず、磨き上げられた長靴のつま先で床を引っ掻き耳障りな音をたてた。

「来い、イズキ中佐。ここへ立つのだ。見よ、わしの軍団を」

カマクラ將軍は眼下の軍団を誇るかのように両手で示した。

「精強な軍団です。あー、これはお世辞でない意見ですよ」

「そうだ」

「そして、もはやこの樺太にこれに対抗できる勢力はありません。原住民はもちろん、解放派にもまとまった軍団は残っていません。全て我々につぶされました」

この二週間で、敵対勢力は全て粉碎され終えていた。波打ち際で

彼らを止めようとした集団は、くすぶる鉄塊を砂浜にまき散らすだけしか成果を上げなかった。

これは当然の結果と言えた。

日本軍の精強さは半島戦争以降、世界の果てまで鳴り響いていたし、カマクラ将軍は戦の勝ち方というものを知っていた。兵はカマクラ将軍の期待によく応えて戦果をあげた。

すでに戦鬪は残敵の掃討という段階に入っている。カマクラ将軍はこの大泊の本拠地にとどまり、直接の指令はもう出していなかった。

「その通りだ」

カマクラ将軍は言って、窓のわきの戸棚を開けた。

「年代物のスコッチがあるんだが、どうだ、イズキ中佐？」

「消化器官からのアルコール摂取ですか？ 小官にその習慣はありません」

「そうかい」

カマクラ将軍はうなるように言って自分の分だけアルコールを注いだ。

「では、イズキ中佐、なぜわしはなぜ敵のいないこの地で大軍をかかえているのだ？」

「敵ならまだいますね。落ち武者が。まだ過激な解放主義者が森のどこかに隠れているはずです。しかし、彼らを相手するのに閣下のお力は必要ない」

「その通りだ」

「PCO軍令本部は閣下に北方四島を襲えと命じた。違いますか？ カマクラ将軍はのどの奥で笑って正解を認め、紙巻きを吸いながら酒を喉に流し込んだ。

択捉、国後、色丹、歯舞の北方四島は解放主義へ賛同し、曖昧ながら日本へ敵対的と受け取れる態度を表した。しかし、樺太解放派への軍事的な支援は一切行わず、日和見に徹している。

「北方四島が傍観しているのは保身のためだ。解放派への忠義など

欠片も持っていない。そして我々PCOへの忠義もな。解放派が破れた後、その領土をかすめ取り、我々の先鋒面でもしようとしたのだらう。ふざけた連中だ」

「ですね」

イズキ中佐があいの手を入れた。

「奴等を攻撃するには、より積極的な手法をとるつもりだ。北方四島は我々の奇襲によって、樺太よりも早く陥落するに違いあるまい」
カマクラ将軍は、手にしたサーベルの先端で床を突いた。

3 自由の民

解放派の根底にある理念、解放主義は1978年にシエルの首都北京でおこった。

列強大国間の絶え間ない抗争を無意味と評価し、国家という概念を捨てて、より大きな枠組みでもって人類に調和をもたらすべきだという考えは、列強の圧制下の地域で熱烈に支持され、たちまち北はソビエトから南はスコットランド領インドまで野火のように広がっていった。

これに対処するため列強は一時的とは言え休戦し、本腰をいれて解放主義を討伐していかなければならなかった。

解放派勢力は北から日本を脅かし始めた。それに対抗するべく日本は正規軍を派遣して解放派を叩きつぶすという古典的だが、有効な手を使っていた。

4 掘出物

ソウとアメフは苦勞して、その掘り出し物を秘密基地へと持ち帰った。

日本軍を気にして街道は使わず、灰色の荒地と森を通過して帰ったため普段の五倍は時間がかかった。

日本軍のおかげで全ては悪い方向へと向かっている。

ソウが基地周辺の足跡を消すため秘密基地の入り口のはね上げ戸をくぐって出て行った。

秘密基地は半地下の建物であり、内部は明かり取りの小窓からわずかに光の差し込むだけの薄暗い空間だ。二人とも全身泥まみれで基地のフローリングの床もすでに黒と茶色に彩られていたが、アメフの興味は床へと向いていなかった。

彼は夏用の食料庫に頭を突っ込んだ。だが、期待していたものは何も見つけれない。

「空っぽだ！ 稚内や大泊でキャビア製造工場を沢山見かけたぜ。

なのにここには魚の缶詰一つないのかよ」

アメフは不機嫌に樺太解放派を罵った。

兵站の考えのないアマチュア軍隊め。

樺太へやってきたのは大きな失敗だった。ノボシブルスクのモザイク状つぎはぎボロ公営アパートから出ず、詩集片手に寝転がりヴオトカをチエイサーにシグリョーフスク・ビールをおりながら、樺太解放派の実力を見極めて、加わるに値すると判断して、しかる後に動くべきだったのだ。

樺太解放派の決起の時期はまずかった。日本軍と正面きって戦おうという無謀な考えもまずかった。まずくない物の方が少なかった。また、一方で日本軍が樺太へわざわざこうも大軍を送り込んでくるとは、アメフを含め誰にも予想できなかった。

今回のことは教訓にすべし。

アメフは心に誓うが、とにかく生きてこの島を脱せねば、その教訓を生かすチャンスもなかるう。

ソウが戻ってきたのに気付き、アメフは背負っていた背囊と武器を壁に立てかけた。

「他の解放派と連絡は付けられなかった。そこら中、日本軍の通信だらけだ」

アメフはそう言ってあご髭をつねった。

「意外でもない」

ソウはつぶやいた。

「生き残っている解放派は僕達だけと考えるべきかもな、アメフ」

「だが、敵のカマクラ将軍は完全に樺太解放派を滅ぼしたと確信しない限り、捜索の手は緩めないだろうよ」

アメフは敵の将軍の名を、喉にからまるなにかを吐き出すように発音した。

「ああ。間違いない。カマクラ将軍は名将だそうだ。樺太解放派は十分に用心するべきだったんだ」

解放派の他のメンバーによる日本軍への無謀な攻撃を思い出し、ソウの中で怒りが熱く渦巻いているのをアメフは察した。解放派の他のメンバーはソウの忠告を全て無視し、日本軍を過小評価していたのだ。

あの連中は1950年の半島戦争における、日本軍の暴れっぷりに関するデータをまったく読まなかったのだろうか。

ソウは発掘屋として樺太解放派に招かれたらしい。発掘屋として、有能なのだろう。しかし、彼は明らかにまったく役にたっていないかった。

そろそろ、自分のことをセイシエルからわざわざ呼び寄せられたコメディアンとでも感じはじめていることだろう。

とにかく、樺太解放派はソウの例に限らず、概して人間の使い方のみずい組織だった。

それに対し日本軍は世界最強レベルの軍団で、どこかの田舎の民

兵とはわけが違う。日本軍はぼんくらを基地内菜園の肥料運びの人夫などに任じ、また蛇のような目をした、三度の飯より他人をおとしめるのが好きな人々を参謀部へと配するシステムを作り上げているとされる。

ソウが解放派でなにをしたかったのか、アメフは知らない。だが、それが日本軍への復讐であれ、発掘屋社会での立場向上を狙った物であれ、樺太解放派が壊滅した今、実現はひどく難しくなっているに違いない。

「さて、掘り出し物を開けてみようか」

「なにかめばしいものでもあれば樺太から脱出する金になるかもしれないしな」

二人は資金不足だった。樺太通貨の札束ならいくらでもあるが、それらにもはや価値はない。日本のPCO円が必要だ。

陰鬱な木材と石でできた部屋の中央に、がつしりした作りの箱が置かれた。二人が地中から掘り出すまでの長い期間の汚れが、ある種の異様な雰囲気装箱にもたらしている。

古びて黒ずんだ錠をアメフはシャベルでたたき壊した。

地獄への入り口のように口を開けた箱に上体をいれ、ソウは黒い布に包まれたものをうやうやしく取り出す。

布は波打って広がり、掘り出し物は姿を見せた。

「……ちきしょう、陶磁器か？」

アメフが言つてシャベルをがらんと投げ捨てた。

それは巨大な杯に見えた。頑張れば、一人の人間でも抱えて運べるだろう大きさだ。

「売り払うには骨が折れそうだな。平時ならともかく、今の樺太にこれを欲しがる奴がいるとは思えねえ」

ソウは目を細めて、掘り出し物をなでた。鉄ともガラスともつかない質感だ。複雑な装飾が施されていて、杯の縁にもとげとげした飾りがついている。群青色の表面は光のあたり具合で赤や緑の色を浮かび上がらせた。

「たしかに陶磁器としてもそれなりの価値を持つのかもれない」
ソウは言った。

「だが、これが本当に僕の探している物なら、その真の価値は極めて実用的なものとなるはずだ」

「ほう？ 実的に？」

ソウは懐から手帳を取り出して、唱えた。

「目覚めよ」

指で杯の内部に複雑な模様をなぞっていく。まるで何を描くべきか心得ている絵師の様な手つきだった。

このソウの不気味で不思議な行動を眺めていたアメフの耳が何かをとらえた。コオオオ……と聴いたことのない魂を揺さぶるような甲高い音。音はたちまち大きくなり、アメフの歯の根は合わなくなる。

壁が、ガラス窓が細かく震えた。

一心不乱に指で紋を描くソウ。

杯の底から墨汁よりも黒い、どろりとした液体がしみ出し、ソウの手首まで沈めた。

アメフの背筋を冷たいものが走った。

「面妖な」

ソウは唇をつり上げ、普通の発掘屋は浮かべることのなさそうな類の笑みを浮かべた。

それから、杯の尖ったふちに、空いている方の手を押し付ける。

アメフは血に見慣れていた。それでも、ひるむほどの血が滴り、杯に流れ込む。

「アメフ、おまえも血を出して、この中に手を入れる」

「ふざけるな」

「生きて樺太から出たいんだろ？ 言う通りにしろ」

「くそ、解放派のために、もう十分血なら流したぜ」

アメフは傷だらけの籠手と革手袋を脱いで、手のひらをさっとナイフで切った。

赤い液体が溢れ出る。そして、いやいや暗黒の中に手を差し入れた。

アメフは野外経験豊富な傭兵だった。だがそれにもかかわらず、次の瞬間、彼を襲った冷たさに度肝を抜かれた。

それは死そのもののような一瞬の冷たさ。

あまりに早く手を抜いたので、アメフは悲鳴を上げずにすんだ。

「畜生！　なんだ今のは！」

アメフは転がって立ち上がった。肩で息をしている。

「おまえがプレイヤー2、僕がプレイヤー1だ。登録した」

ソウは暗い笑みのまま己の手をゆつくりと引き抜いた。杯の中の波紋はおさまらず、むしろ激しくなった。

ゆつくりと黒い波面から骨のように白い固体が浮かび上がる。

アメフはうめきとも喘ぎともつかない声を漏らした。

そう大きいものではなかった。人間の頭骨四つ分ほどだが、実にてこぼしている。無数の切子面を光らすそれは水晶だった。

と、アメフは浮かび上がった水晶塊は見覚えのある形であることに気付いた。

樺太の島の形だ。

不気味な水晶で作られた数百万倍も縮小された俯瞰地図なのである。

「ソウ！　なんだこれは？　いい加減説明しろ！」

「ゲームだ。僕の知る限り最も大規模なボードゲームといったところだ」

発掘屋が応えた。再び黒い海が揺れはじめる。ソウは樺太の西、アメフは東に座っていたが、彼らの手元の海域からそれぞれ同数の水晶の塊が浮かび上がって来た。

「おい、ソウ、ゲームで遊んでいる暇はないぞ」

「アメフ、気付いているだろ。これはただのボードゲームではない」

二人の手元に浮かび上がって来た小さな塊は二十個近くで、その形状にはいくつかのパターンがあるようだ。

明言できるのは、揃いも揃っておぞましいデザインであるということだ。ソウはそのうちの一つを感慨無さげにつまんで手の中で転がした。

「ポーンか」

カツツと音をたててそれは樺太の一角に置かれた。

「僕がこいつのことを知ったのはずいぶん昔のことだ。でも、泊居だとかいう街の図書館廃墟で古文書を見るまでは実在するとは考えていなかった。その持ち主はこれを本物の、価値のないゲームだと思っただけであんなところに捨てたのだろう。だが、残念ながらこれは立派な古代兵器というわけだ」

「わけがわからん」

「すぐに分かるようになるさ。水晶盤が作られたのは六百年以上前。当時の大陸勢力が侵攻して来た際に、日本が太古のテクノロジーから作り出したとされる。こういった強力な兵器は江戸時代に集められて破壊されていったが、その手は樺太まで届かなかったようだな」

ピシピシと音がたつた。

樺太の島の表面から水晶の駒達が自力で分離し、立ち上がっていく。その数は三十体ほど。

色は、積もった埃のような灰色だ。ある駒は二本の足で立ち、ある駒は四本の足、そしてまた、ある駒は車輪を持っていた。

彼らの大半は樺太南部に固まっている。

唐突に気付いてアメフはぞっとした。

この灰色の一団は、樺太に上陸した日本軍の醜悪なカリカチュアなのだ。

それぞれがその形状で歩兵、騎兵、あるいは機械化部隊を表しているようだった。

「馬鹿な」

アメフは激しく首を振る。

「そんなわけがない。これが六百年前に作られたのなら、日本軍を模した駒であるはずがない……」

「いや、それでもなさそうだ。見ろよ」

ソウが灰色の駒のなかで最も大きな物をさした。それが天へと掲げている突起は王冠を想像させる。

「これが王将だろうけど、こいつが座っている場所は大泊だ」

「日本軍の司令部か！ くそっ！ この王将はカマクラ將軍を表しているのか！ どういうことだ？」

「知らん」

ソウは言ったが、その顔の笑みは隠していない。

「だが、当時の技術は本当に素晴らしかったのだろうな。今なお、これだけ正確に敵軍を評価できるのだから」

「水晶盤は調査の機械なのか？」

「……いや、これが完全に稼働するなら、その能力はこんな物じゃないはずだ」

新たな駒が音を立てて盤面から生えた。二つの王将が並んで立ち上がる。一方が赤で一方が青。

「どうやら僕が赤のようだな」

ソウがあごに手をあてがって言う。

気がつけばソウの手元の駒は赤く染まっていた。炎を固めて作られたダイヤのような赤だ。

対してアメフの駒は、悲しげな青。

ソウは手元の駒をいくつか王将のまわりに並べてみた。この王将が自分自身であるということに、もはや疑問を抱いていない様子だ。
「ゲームスタートだ」

水晶盤が脈動し、それに呼応して二人の足下の樺太も震えた。

微弱な地震とともに人間には感知するすべのない声が波となって樺太を駆け巡り、太古の忘れられた信号が飛び交った。

無音だった森は今、騒音に満ちていた。地面がひび割れ、死んだ巨木がひっくり返される。

ソウとアメフは急いで秘密基地から飛び出る。日本軍の登場にしてはあまりに騒々しい。

これは天災だとアメフは考えた。

ソウの発掘は、この島の地盤になにか悪影響を与えたのだろうか。二人の眼前の大地が立ち上がり、めくれる。

アメフは即座に伏せた。だが、ソウが惚けたように突っ立っているのを見て、毒づいた。

困った発掘屋だ！

そのとき、地中から赤黒い異形がその身を引きずり出した。泥をはねとばしながら甲殻に包まれた四肢をくねらす。

「化け物だ！」

アメフはうめいた。信じがたいことだ。

恐怖に似た衝撃がその心をわしづかみにした。武器は？ 秘密基地の中だ。取りに戻る暇はない。

化け物の単眼がゆっくりと二人へと向く。

そして化け物はゆっくりと……平伏した。ソウに向かって。

「なんだと？」

アメフは啞然とした。ソウの肩が震えた。そして彼は狂気じみた笑い声を漏らす。

「完璧だ！」

「……ソウ？」

「まだ分らないのか？ これは僕の駒だ。現実の日本軍が水晶盤の上に存在するのと同じく、水晶盤の上の駒は現実に存在するんだ」アメフはそんなの信じられない、という顔でその化け物を見ていた。

神話に悪者として登場しそうな姿だ。四本の節ある後脚で体を支えていて二本の前脚にはカマキリの様な鎌がある。身長は六メートル

ルはあるだろう。圧倒的な重量感を誇って、微動だにしていない。

そして、いまやソウが水晶盤の上に置いたのと同じ数だけの化け物が樺太の上において、主人の命令を待っているのだ。

「僕が今まで発掘した物の中で一番劇的な効果を引き起こす道具だな。さあ、アメフ、ゲームの続きだ」

ソウは秘密基地へと戻ると、水晶盤の前に座る。

「日本軍は樺太の解放派を滅ぼすことは出来たが、奴等はまだ勝つてはいない。次は僕達の番だ。日本の子は眠る前に僕達を恐れることになるんだ」

アメフはもう一度化け物を見上げた。そして、腹を決めてソウのところへ戻っていった。

ソウは嬉々として新たな下僕を樺太のどこかで目覚めさせている。他に樺太を脱出する方法なんてないんだ、とアメフは自分に言い聞かせ、青い駒を樺太に置いた。

水晶盤と樺太が歓喜を表すかのように再び震えた。

5 攻撃

二度の小さな地震は何ら実害をもたらさなかったが、その後、樺太を包む空気が変わった。

森から動物の声が消えた。鳥は空へと逃げ出した。それは季節外れの渡りなどではなく、算を乱した逃避であるということが素人目にも分かった。訓練された日本軍の馬や猛獣も落ち着かなくなった。

そして

「一体何が起こっておる？」

ずどんと重たく扉が開いて、カマクラ将軍が戦略室へと入って来た。イズキ中佐の差し出したモールス信号のテープをひったくる。

『真岡偵察信号所ヨリ大泊指令へ。見慣レ又生キ物ニヨル攻撃。奇襲ヲ受ケ混乱シテイル。信号所ノ放棄ノ許可ヲ求メル』

『敷香補給基地発。我が基地ハ攻撃ヲ受ケテイル。今スグ救援ヲ。』

敵ハアヤカシ。思ウニ、此レハ霊的生命ニヨル侵略デハ？」

「馬鹿馬鹿しい！ なにが霊的生命による侵略だ！」

カマクラ将軍の顔が憤怒の色に染まり、テープは破り捨てられた。「ええ、人間の敵は人間に決まっていますからね。名前を忘れましたがどこかの詩人がそういう風に表現していました。えー、ところで豊原以北の主要部隊全てが奇襲を受けたと考えられます。そして多くがすでに通信を途絶しました」

巨大なテーブルに樺太の地図が広げられた。イズキ中佐が感情を交えずに手元のメモを読む。

「一体何者だ？ なぜこうも簡単に我が軍を襲える？ どの仕業だ……シエルか？ アメリカか？ はたまたソビエトか？」

「間宮海峡にも日本泥海にも味方艦隊はいます。沿岸警備の者からも敵上陸の報は入っていませんよ」

イズキ中佐が自明の理であることを口にした。

「知つとるわい。今のは自問自答じゃ。列強大国でないとすれば敵は明らかだ。解放派だ」

「へえ？ 北方四島のですか？」

「いや、樺太の解放派だろうな。生き残りの反撃だ。調べる！」

イズキ中佐は一礼すると、早足に退出した。

テーブルの上には日本軍の軍勢を表す人形が並べられていく。敵軍の人形は置かれていない。その正体はまったく不明で、混乱とヒステリックな言葉のベールに隠されている。

「ホデラ大佐、サキガワ大佐を原隊に復帰させる。全軍はわしが動かす。おまえ達はわしの手足となって敵を止めるのだ」

カマクラ將軍は雷のように下知を飛ばした。

6 ルール

水晶盤はチェスや将棋に似ていた。駒の動かし方はどちらとも違ったが、当然だ。間違いないく、六百年前に流行していたボードゲームの祖先の動かし方が求められていた。

ソウはお世辞にもうまい指し手とは思えなかったが、アメフも似たり寄ったりだ。

ソウは、軍隊の指揮経験が皆無の人間でも、容易に水晶盤を操作できるように当時のゲームを忠実に模したのだらう、と語った。

駒は秘密基地周辺の数キロの円の中ならどこでも置くことができた。

その度に解放派は新たな兵を得た。

一本の腕とひよる長い体の『ポーン』。最も小柄な駒だったが、それでもその身長は四メートルをこえた。

六本本の蜘蛛の脚のような前脚をもつのは『ルーク』。

『ナイト』は二本の槍のような前脚をのばしていたが、後脚は退化でもしたのか蛇のような幅広い胴体をくねらせていた。

そして、『ビショップ』は先ほど二人の眼前に現れたあれで、最も大きかった。

攻撃用の駒はそれだけだった。当時の駒は、今日のボードゲームよりも種類が少なかったのだ。

王将を動かすには、ソウやアメフが自分の足で何キロか歩く以外方法はなさそうだが、それ以外の駒は古典的な方法で動かすことができた。つまり、手でつまんで水晶盤の上を移動させるのだ。

駒に触れると、それが進むことのできる場所がぼんやりと光った。

日本軍への攻撃はアメフの提案のもと、同調的に行われた。

ポーンが、あるいはルークが日本軍の通信中継所や補給物資の集積所へとなだれこんだ。

日本軍の人間の駒は串刺しにされ、軍馬は八つ裂きにされた。砕けた敵の駒が転がって硬い音をたてる。

と、壊れた駒は見ている前で水晶盤に吸収されて消えていった。灰色の駒は始めから存在しなかった物のように、その存在を隠した。青い駒と赤い駒は命じられた通りに的確に破壊を行っていく。

日本軍は何ら反撃をできない。ただその数を減らした。「灰色の駒が砕ける度にどのぐらいの日本軍の兵が死んでいるのだろうか？」

アメフが言った。

「知らんが、少なくともないだろう」

ソウは興味無さげに言ってビシヨップを斜めに進めた。途中からビシヨップは自力で歩いて野戦砲らしき駒へと飛びかかった。

「日本軍は虫けらみたいに解放派を殺した。今日は奴らが大昔の化け物に虫けらみたいに殺されるっただけの話だ」

ソウは秘密基地の小さなキッチンへ、這い進んでいった。

「おまえの番だぞアメフ。紅茶いれるけど、おまえいらないよな？」
アメフは生返事で拒否を表明しながらナイトを進めた。これで樺太中部の日本軍施設は壊滅だ。北部にもともと大した勢力は無いし、荒野をパトロールする小規模の部隊はとるに足らない存在だろう。放っておくとする。

四年前、中国でシエルと戦ったとき、中国人の老兵達がこういうボードゲームにのめり込んでいるのを見たが、今はあのとき教えを請わなかったことが悔やまれた。

アメフが中国で学んだのは対人地雷の扱い方だけだったのだ。ボードゲームで重要とされる定石なんてものは知らなく、自力でコツを掴んでいくしかない。

だが、アメフの憂慮をよそに盤上では戦いが進んでいった。彼が考えるよりも、はるかに戦況は有利に展開していく。

化け物の駒達は薄布を裂くように日本軍を分断していくのだ。日本軍はこの異形の化け物に太刀打ちができていない。

アメフはこのゲームのルールを取り違えていたようだ。

ソウと協力して日本軍と戦うゲームだと思っていたのだが、そうではない。

ソウとアメフ、どちらがより多くの日本軍を狩るかを競うゲームだというわけだ。

7 プレイヤー

カマクラ將軍の部下はよく訓練されていた。そのため、この不合理的な事態にもかかわらず、戦略室は落ち着いていた。部屋の奥で通信機が規則正しい金属音をたてている。

カマクラ將軍は顔をしかめていた。テーブルの上の地図を睨むが、効果は上がらなかった。

敵の正体は浮かび上がってこない。カマクラ將軍は長考の構えで腕を組み、窓の前をうろろろと行ったり来たりしていた。

まず、敵の姿が不思議な生物であることは分かった。だが、ただ解放派によって訓練されただけの、攻性生物ではない。

その動きに人間の知性の形跡はしつかりと表れている。

しかし、その内容は頭に浮かんでこなかった。解放派の用兵は奇抜に思えた。敵の將の心理が読めないとあつては、カマクラ將軍は動くことができない。

焦りの念が自分の心の中で焦げあとのように広がっていくのを、カマクラ將軍は客観的に観察していた。

「イズキ中佐、戻りました」

「おお」

解放派の死体検分へおもむいていたイズキ中佐が戻ってきた。フアイルをカマクラ將軍へと手渡す。

「それで敵の名は？」

「発掘屋のソウと傭兵のアメフと思われませう」

イズキ中佐が完璧に正しい発音で二人の名を口にした。

「あと、数名名前があがりましたが、おそらくその連中は海軍によって始末されています。このソウとアメフはほぼ間違いない生きています」

「御苦労」

日本軍の優秀なスパイネットは、交戦の遙か前から、樺太のちゃ

ちな敵対組織の全容をつかんでいた。

加えてイズキ中佐とその部下の政治将校達はPCOの秘術を身につけている。彼らは顔のつぶれた死体であれ、焼けこげた死体であれ、遺伝子とかいうものを検分し、死者の正体を定めることができる。

樺太の解放派メンバーのリストから死人が除かれると、残ったのはほんの一握りだった。カマクラ將軍は二人のプロフィールに目を落とした。

「この若造二人とはな。どんな魔法を使っておるのか知らんがたわけた連中だ」

「いかなさいます?」

「その地図をどける。いままでわしは敵を訓練を受けた士官だと考えていた。やり方を変える潮時だ」

8 歴史の狭間

樺太の地の底には、建造以来一度も光を浴びていない機械が埋ま
っているのだろう。

それは六百年以上の昔に、当時の天才達によって想像され、決戦
の時にそなえ極秘に地底へと隠されたのに違いない。

瑣末を今の時代の人間が知ることはできない。
忘れ去られた事柄だ。

アメフも、表面的な歴史学で、その時代に関する単語をいくつか
知っているに過ぎなかった。

そして今、それを使って巨大な脅威を取り除こうとしている。ま
ったく信じがたいことだ。

彼らに使役される巨大な化け物が、この荒れた世界を縦横無尽に
駆けた。

盤上の日本軍の数は半分に減った。奴等がこれほど損傷を出し
たのは久方ぶりだろう。

解放派は無傷だ。

ソウはなぜか秘密基地に貯蔵されていたペルシアの鋭い匂いを放
つお茶をすすっているし、二人とも日本軍を狩るのに、指を動かす
以上の努力はしていない。

この水晶盤は樺太の外で機能するのだろうか？ もしそうなら、
事態は大きくなる。

解放派は、いつでも好きなときに化け物の軍勢を用意できる。ソ
ウの台詞通り、日本は列強の大国よりも、解放派を恐れる日がやっ
てくるのだ。

……まあ、それは日本本土へ水晶盤を運び込んでみないことには
分からないことだ。

昨日までは漁船を奪ってこの島から逃げだす方法ばかり考えてい

たのに、いまや極東の好戦的國家を倒す算段を頭の中で巡らせている。アメフは皮肉っぽく笑みを浮かべ、あご髭をつねった。

おかしいことになったものだ。

だが、これはこれで面白い。

ソウはアメフの方を見もせず彼の駒を進めていた。

9 展開

撃ちまくれ！

兵士達の口が異口同音にそう発音する。だが、あまりの騒音のため声は通らない。

一斉に鉄砲が火を吹き、化け物の体に鉛弾が食い込んだ。重機関銃はライフルよりも重たい音をがなる。化け物の体液が木や岩へと降り注いだ。

だが、そのルークはひるむそぶりも見せないで突進を続ける。明らかにこの化け物に痛覚は無いようで、その動きは機械のようだ。ルークが長さ一メートルもの爪を六本振り回すと、兵士の首が飛び、瞬く間に死体の山ができた。

そこへさらなる銃弾の雨が降り注ぐ。だが、ルークは跳躍し、機関銃座の兵士の体を土囊ごと串刺しにする。

そのとき、空気の弾ける鋭い音がした。白煙をまとった弾丸が飛来する。歩兵携帯式無反動砲から放たれた炎の使者だった。

戦車の装甲を破って内部の人間を殺傷すべく考案されたこれはシンプルな作りながら強力な武器だ。

オレンジ色の炎が膨らんだ。ルークの上半身が黒い炭となり四散する。節のある細長い脚がゆっくりと傾き、地面に倒れた。

生き残った兵士が塹壕の中から歓声を上げながら出てくる。化け物の死骸を囲んで、それを蹴飛ばした。

アメフは自分の駒が碎けるのを見ていた。

「残念だったな。それは捨て駒だ」

「いい手だ」

ソウが評価した。勝ち戦の最終局面へと至る場面で、つまり勝負の流れが完全に自分の側にある時、敵の崩壊の順序が鮮やかに先読みできる時がある。

今がその時だった。アメフは畏の仕掛けバネをはね上げた。

森が考えられないような力で真つ二つに裂かれ、異様な姿が躍り出た。

四本の脚を複雑なパターンで動かすビシヨップだ。

ひるむあまり呆然とする兵士達に雷のように襲いかかった。

殺戮は一瞬だ。

「あれは発掘屋の仕業か？ あるいは傭兵？」

カマクラ将軍は望遠鏡をおろした。窓の向こうの戦況は悲惨だ。

日本軍は激しく抵抗しているが、化け物の進撃のスピードは鈍りもしない。

「どちらでもいいことか……さして変わらん。奴等が操っている化け物の正体が問題だが……」

「ホデラ大佐の部隊はもう駄目ですね。あの豪胆な軍勢は銃弾の代わりに悲鳴をばらまきながら逃げ散りました」

イズキ中佐が言った。

「わしが陣頭に立つ時がまた来ようとはな。半島戦争以来だ。何が起こるとも分からぬ時代になったものだ」

いまやカマクラ将軍は樺太の広大な地図は見ずに、木製の素朴な作りのボードゲームを置いて、自軍と化け物の戦場を作り上げてい

た。

「こつちの方が今の戦場を表すのには適しておる」

「なるほど。ですが、すでに戦線はスタスタです。時期を逸したようですね」

「それならイズキ中佐、皆に武装させる。ここが最後の砦となろう」
カマクラ將軍は碁石をとって盤面へと打った。

「敵の動きはわしに何かを思い出させようとしているようだ。あの化け物ども……あの動き……」

カマクラ將軍の独白は尻すばみに消えていった。

「努力すれば、きっと思い出されるでしょう」

イズキ中佐が言った。

ソウが、駒の頭部を回せば、それはとれるということに気付いた。ネジになっているのだ。

首をひねりながら、アメフはとってみると言った。

ポーンの頭部が無くなり、ぼつかりと黒い穴が空いた。

そしてそこからは戦場の音が流れてきた。銃撃の音、悲鳴、怒声、爆音。そしてこのポーンの走る、足音。

「本物の戦場の音か？」

「ああ。たぶんな。聞き慣れた音だ」

アメフが低い声で言った。

今まで戦争を行っていたことを完全に忘れていた。

だが、結局はいつもと同じ殺し合いが続いている。アメフの代わりに化け物の代理人が戦場に立って、敵と殺し合っていること以外、客観的には何の変化も無い。

ソウの言う古代兵器も、産み出す結果は同じだとアメフは悟った。冷水をぶっかけられたように興奮ざめだった。ソウの顔も衝撃に引きつっているように見えた。

「どうしてこんな機能が？」

「通信用だろう。こういうものがあることは予想していた。前線と後方の水晶盤の指し手の間にこういうものが無いという不便だからな」

ソウは驚きから回復し、唇をつり上げて笑った。ポーンの頭を戻して、騒音を閉め出した。

「いろいろ使い道がありそうな機能じゃないか。さすがは水晶盤だ」
ソウはそう言うと、老人のように背中を丸めて駒を進めた。

アメフの方が多くの日本軍の駒を壊していたが、ソウの方はカメラ將軍の本陣へ攻め込む準備を整え終えている。

まだ勝者は分からない。

アメフは気合を入れ直し、ゲームに専念しなければならなかった。この戦いでアメフがソウに勝利することには意味があるように思えた。たとえば、これがゲームに過ぎないとしても、だ。

後日、再結成するであろう樺太解放派での、アメフの発言力を強めてくれるに違いない。

「サキカワ大佐の部隊もほぼ総崩れです。大泊の外縁守備隊は原型をとどめていません」

イズキ中佐は相変わらず、あらゆるものに対する興味を欠落したかのような声で報告をした。

「海軍に、撤退の支援の要請をしますか？」

「ふん。時間の無駄だ」

カマクラ将軍がうなるように言った。その言葉は強がりとも、絶望からきた無意味な言葉とも受け取れた。イズキ中佐は死にかけて軍を再編するべく出て行く。

「わしの手銃を持って。カマクラ将軍自らが敵の相手をする」

分厚い木の扉が弾けるように開いて、第二種軍装をまとったカマクラ将軍が指令本部から姿を現した。両側に護衛が続く。なんの前触れもなくカマクラ将軍前方の対空監視塔がメリメリと音をたてて崩れ、粉塵を巻き上げた。

そこには不気味な外骨格を備えた化け物の姿があった。

護衛達が後ずさる。

「うるたえるな。立つべき場所に立っておれ」

カマクラ将軍が深い声で部下を静めた。

そして巨大な敵へ向かって声を張り上げる。

「化け物よ、なんの目的で日本軍を、わしの軍を襲う？」

化け物は鈍く光る単眼でしばらくカマクラ将軍を見下ろしていたが、ゆっくりとその鋭利な鎌を下ろした。

敵はこちらの将を識別できるのか、とカマクラ将軍は不愉快な気持ちになった。

化け物が音をたててその大顎を開くと、そこかしわがれ、雑音にまみれた日本語が流れてきた。

「目的？ 復讐とでも言うべきなのだろうか。おまえ達がやって来

て、こつちを大勢殺したから、こつちもそれをやってやっただけだ」
「解放派か」

「御名答。カマクラ將軍、はじめまして。あなたの名前は以前からよく耳にしていた」

化け物から言葉は発せられたが、化け物は微動だにしない。

背後で喋っているのは発掘屋なのだろうか。あるいは傭兵か。

「貴様も名乗ってはどうか？」

「それほど高貴な名は持っていないさ」

「よかるう。では解放派指揮官、休戦しないか？ そちらも少なくとも兵が傷ついたらさう」

「そちらほどじゃないさ」

「だが、これ以上戦うことになんの意味がある？ 我々は樺太から去るつもりだ。戦わずとも樺太は自動的に貴様の手に入る」

ソウは陰鬱な笑い声を首の無いビショップに注いだ。

「將軍、勘違いするなよ。おまえは僕達と戦争をしているわけじゃないんだ。僕達に狩られるための標的なんだ」

アメフはソウの言葉を黙って聞いている。ソウよりましな外交能力を持っているとは思っていないし、カマクラ將軍にかけるべき言葉も無かった。

あの悪党には迅速な死こそがふさわしい。

カマクラ將軍は絶句でもしたのか返答しない。かまわずソウは言葉が続けた。

「將軍、おまえの軍はすでに崩壊した。抵抗をやめて逃げ出したらどうだ？」

「なんだと？」

「僕達はゆっくりとおまえ達を追いかける。運が良ければ、おまえ

達の何人かは生きたまま海に飛び込めるだろう。おまえ達も巨大な敵に追いかけられる恐怖を体験しておけばいい」

「おやおや、とアメフは苦笑した。カマクラ將軍を動かし、狩りやすくしてアメフとのゲームを有利に持つていこうという肚か。」

困った奴だ。

ソウは素知らぬ顔だ。

「このわしがそんなことを受け入れると思ったか？」

カマクラ將軍の顔が紫色へと変わった。

「さあな。まあ、いいや。どのみちおまえを殺せばおまえの部下は逃げ散るだろうよ。大した変化は無い」

化け物は会話を切り上げる気配を見せた。

カマクラ將軍は激怒を装っていたが、思考は敵を冷酷な刃先のように分析していた。

化け物の背後にいるのがどちらの敵なのか、確信は持てなかったが、発掘屋の方だろうと予測を付けた。軍人にせよ傭兵にせよ、人殺しは手柄首を前にして多弁にはならないものだ。

だとすれば、敵は人間よりも骨董を相手にするのが得意な者だろう。

「ところで、その新しい掘り出し物の使い心地はどうなのだ、発掘屋ソウよ？」

ソウの肩がびくつと震えた。目が見開かれる。

「正体を見抜かれた？」

息が詰まったような声でつぶやいた。

「落ち着けよ」

アメフが低く言う。

カマクラ将軍がいかに勇将であろうとも、奴は敗北寸前だ。

水晶盤がソウに落ち着きをもたらした。

「流石だよ、将軍。僕の正体なんかとくにお見通しか」

「ソウよ、貴様がわしを憎む理由など無いのではないか？ むしろ感謝してもらいところだ。解放派は貴様の才覚を認めていなかったそうではないか。わしが連中を葬り、引き起こした混乱のおかげで今の貴様があるのと違うか？」

「それもそうだな。感謝しているよ、将軍」

「貴様は解放派にとってなんの役にも立たなかった。貴様にとって解放派の理念なんてものは価値を持っていない？ 貴様に出番のある世の中があるとすれば、貴様より強い者が皆死んだあとの世の中なのだろうな、小物よ」

「よく舌が回るな将軍？ 今までどのくらいの敵をそうやって惑わしてきたのだから知らないが、そろそろゲームを再開させてもらうぞ。僕はすでに大きすぎるほどの力を手にしているんだ」

カマクラ将軍は体を震わすと、歯の隙間から絞り出すように大声を発した。

「力だと？ 貴様が地中から掘り出した骨董ごときが世の中をどうにか変えられると思っっているのか！ 笑わせるな！ 時代が貴様らのような発掘屋を必要としていないのが分からののか！ 貴様の自慢の骨董なんかこの手で砕いてやる！ 貴様なんか」

「僕の水晶盤は無敵だ！」

化け物の喉から発せられた声はきしるような叫びだった。カマクラ将軍は声に殴られたかのようにぐらりとよろめいた。軍帽をむし

り取り、両手で頭を覆っている。その顔は苦悶の仮面だ。

「水晶盤！」

「カマクラ将軍、砕かれるのはおまえの方だ！」

「化け物はその鎌を構えて突進してきた。」

護衛がうおつと叫んで銃を撃つ。カマクラ将軍はまだなにかわめいていたが、猛然たる銃声が全ての音を圧倒する。

頭だ！ 化け物の頭を撃て！

護衛達の口が動く。

化け物には他に急所らしい急所は見当たらない。

銃弾は化け物の目を撃ち抜き、さらなる攻撃が頭を熟した果実のように裂いて割った。

だが、化け物は止まらない。よろめきながらもカマクラ将軍を押しつぶす決意に燃えているようだった。

その巨体がわめき続けるカマクラ将軍にせまる。

唐突に強力な機関砲弾がやってきて化け物の後頭を襲った。

一瞬、化け物はそれにさえも耐えたが、黒い卵をつぶすようにして化け物の頭部は完全に爆ぜ消えた。

「すいません、将軍。ホデラ大佐の部隊の生き残りを集めるのに時間をくつてしまいました」

一団の兵と装甲車を率いてイズキ中佐が戻ってきた。

「戦線はすでに修復不可能なほど叩かれていますので……おや将軍？ 大丈夫ですか？」

カマクラ将軍はもう将軍に見えなかった。わけのわからぬたわごとを化け物の赤黒い死骸へとわめきたてる老いた男でしかなかった。その目は灼熱の溶鉱炉の目だ。カマクラ将軍を将軍たらしめていた理性は、寸分も見当たらなかった。

イズキ中佐は目を見張ったのかもしれない。それでも、外見的にはなんの変化も見せなかった。

やがて、カマクラ将軍は肩で息をしながら罵り声をあげるのをやめた。

「……よくやったイソダ中佐！」

「イズキです」

「そうだ！ わしは思い出した！」

彼は護衛を突き飛ばし、よろめくように司令部へと急ぎ戻った。

「敵は水晶盤だ！ ここで食い止める！」

イズキ中佐はその場を部下に任せてあとを追った。

12 水晶盤の覇者

カマクラ将軍は急速に老い始めたように見えた。なにかに憑かれた表情で戦略室のテーブルから碁盤やら書類やらをたたき落とす。ぎよつとした顔を浮かべる士官達をイズキ中佐は追い払った。

「なぜだ！ なぜわしは水晶盤をこつも理解できる！？」
イズキ中佐は口を開いたが、老人の今の言葉が自分への問いでないことにすぐに気付いた。

老人は素早く樺太の地図の上に日本軍を表す人形を並べていった。同時にイズキ中将もどこからともなく化け物を表す人形を取り出し、地図の上に並べていった。

カマクラ将軍は苦しげに息を吐き、そして骸骨のような笑みを作った。

「だが、いまやわしもこのゲームに加わっているようだな」
地図の上の人形が自力で動き出した。

現実には作用する水晶盤の効果で、現実には改変されていく。そんななか、この樺太でのゲームはその様相を変化させた。日本軍側もゲームのピースの一つと化し、ゲームへと適応していった。

日本軍の灰色の駒は青の駒、赤の駒と同等の力を発揮した。

「なんだと！？」
ソウが驚愕の声を上げた。

日本軍の灰色は、攻め込んだ青を一瞬で困んで砕いた。

コブラのように鋭い反撃だった。まるで花火のように青い破片が水晶の上を弾け飛んでいく。

「くそ！ 僕の軍勢が！」

一方、アメフの軍勢はすでに体勢を整えていた。赤は殺意の奔流となって樺太を縦断する。

だが、灰色の軍勢も不自然な滑らかさで迎撃の体勢を作りだす。アメフは鈍いシヨックとともに悟った。敵の動きはゲームの駒の動きだ。もはや戦場には怒りや恐れといった感情は存在しない。あるのは指し手の打算だけだ。

カマクラ將軍を表す灰色の王将が禍々しい精気に満ちて日本軍本陣大泊に直立していた。

ソウにはもうビシヨップやナイトといった主力の駒は残っていない。残ったのは駒の駒だけだ。

だが、アメフにはまだ十分な手勢がある。鋭い武器の穂先を敵に向け、その現世のものとは思えない姿で戦場を突き進む。

だが。

それは……それは組織的に迎え撃つ不気味な日本軍の駒と比べて、滑稽なほど弱々しく見えた。

イズキ中佐は司令部から落ち着いた足取りで出てきた。

すぐ近くの戦場では血みどろの戦が広がっているが、いまや流れるのは赤い血ばかりではない。ざらりと軍刀が光って化け物の首が落ちるのが見えた。

そして、日本軍の兵の動きは化け物のそれだ。一切の感情を浮かべず、機械のように化け物に襲いかかる。

力で負けても数では遙かに勝っていた。

化け物の巨大な爪に貫かれ、あるいは切り裂かれた兵士は役目を終えたばかりにその場に倒れて動くのをやめた。

軍勢を指揮するのは名将、カマクラ將軍だ。

勝利は動くまい。

だが、イズキ中佐は眼前で行われている戦は度の低い行事でしか無く、まったく興味を持ってない、といった顔で歩き続けた。

そして先ほど撃ち殺された化け物の死骸のわきで立ち止まった。

「ほう。まだ機能が生きているとは。流石はオリジナルですね」

イズキ中佐は黒い血で汚れた表皮を撫でて言った。それから手袋を脱ぐと、化け物の表皮に指で複雑な模様を描きはじめた。

化け物の頭を失った首の切断面からごぼごぼと体液がほとばしる。

「ソウさん、アメフさん、はじめまして」

初めて聞く声にアメフはぱつと身構えた。

水晶盤の底に波打つ黒い液体からすでに壊れたソウのビショップが浮かんでいて、それが声を伝えているのだ。

「誰だ？」

「PCOのイズキ中佐と申します」

「日本人か！」

「あなた方には礼を言わねばなりませんね。カマクラ將軍を覚醒させてくれたのですから。まさかこの時期に、こんな場所で、こんなことになるとは、夢にも思いませんでした」

「覚醒だと！？ おまえ達なにを企んでいる？ 日本を牛耳る、PCOとは何だ？」

「PCOとは人々によりよい世界を提供しようとしている者の集まりですよ。水晶盤には我々も昔から興味を持っていました。どうなんでしょう？ さぞ素敵な使い心地なのでしょうね？」

声はそれがなにかの気の利いた冗談でもあるかのように、はははと笑った。

「僕達の水晶盤が欲しいのか？」

「いやいや。カマクラ將軍も言っていたでしょう？ そんな物、過去の遺物です。現代には必要ありません。そんなもの無くても我々PCOに導かれた日本は天下をつかめますよ」

ソウの目がかつてないほど鋭くなった。

「しかし、あなた達二人のことは高く評価していますよ。あなた達は実に大胆です。どうです、我々PCOに」

「加われと？ 断る」

アメフは相手の口調に嫌悪感しか感じなかった。

「同感だね」

ソウも言った。

「まあ、そうでしょうね。PCOの理念は解放派の理念の対局に位置していますからね。解放派は我々PCOやそれに似た組織のアンチテーゼとして産み出されたのではないかとときどき思うことがあります」

「なにをこちゃこちゃと」

「どうやら、この乱痴気騒ぎも終わりのようです」

灰色と青はぶつかり合った。

このゲームで最も激しい衝突であった。破片が水晶盤の外にまで飛んだほどだ。

両者は入り乱れて斬り合い、二つの色が混じってしまいそうになるほどだった。

だが、アメフの力はカマクラ將軍に一步及ばない。

それは戦に関する圧倒的な経験の差だった。なんと遠い一步だろうか。

最後の青いナイトが複数の剣に貫かれて碎け散った。

「万に一つの確率でしょうけど、努力によってはあなた方に生き残るチャンスはあるはずですよ。努力して下さい……」

イズキ中佐の気配は消え去った。

ゲームは終わりだ。

ソウとアメフにはもう操るべき駒が無かった。

二人は敗北したのだ。

盤上の生き延びた灰色の駒が、おのおのの歪んだ武器を空へと掲げて無言の歓声を上げた。

ソウがよろよろと立ち上がり、勝ち誇る灰色の王将をガツンと蹴飛ばした。だが、それはびくともせず、ソウに痛みを与えただけのようだ。

「畜生、なぜ勝てなかった？」

「敵を過小評価してしまったのさ。誰もがよく犯す失敗だ。俺は本物の戦場ならそんな間違いはやりはしないが、どうもこういうゲームは不慣れでな」

アメフは言い訳の口を閉ざした。

ひどくくたびれていた。こんなにくたびれたのは久しぶりだ。煙草が吸いたくなった。

「いや、まだだ」

ソウは断固とした口調で言うと、再び水晶盤の前にかがんだ。

「水晶盤が一回限りしか使えない物だと決まっているわけじゃないんだ。六百年前の日本は事実、二度の侵攻を受けた。この水晶盤にももう一度、手駒を呼び出す機能があつていいはずだ」

「おいおい、そんな都合良く」

アメフは固まった。勝利を喜んでいた灰色の駒が再び武器を構えている。そして、それらは間違いなく赤と青の王将を目指していた。「来るぞ！」

アメフは跳ねるように立ち上がった。

ソウも一瞬遅れて事態を察知した。その目に恐怖が浮かび、彼は灰色の駒から後ずさった。

「このゲームを強制終了する機能がどこかにあるはずだ……」

「寝ぼけんなソウ！ 日本軍が俺達を狩りにくるんだ！ ゲームのことは忘れる！ 逃げるぞ！」

アメフは叫んだ。だが、ソウは首を振るだけで立ち上がるとうしない。

そして、アメフもソウが感じていることを理解した。水晶盤の青い王将へと目が吸い寄せられる。

カマクラ将軍は覚醒だとかのおかげで水晶盤を手に入れたのだろうか。状況から考えれば、おそらくこちらと同等の力を彼はすでに手に入れているようだ。

だとすれば、二人はどこへ逃げようとも、カマクラ将軍側の水晶盤の上の王将が二人の居場所を示すだろう。

問題は逃げ切れるかどうか、ではなく死ぬまでどれくらい逃げれるかということになっているのだ。

アメフは絶望に打ちのめされそうになった。

「いや、手はあるはずだ！」

アメフはあきらめない。

秘密基地の裏の武器庫へと急ぐ。水晶盤によって二人の居場所が示されるのならば、カマクラ将軍よりも水晶盤の方を敵と見なした方が良さそうだ。

ソウは喜ばないだろうが、もうあんな物、持っていても得などない。

ソウの水晶盤が二人を王将に決めたのだから、それを破壊すればカマクラ将軍の水晶盤も標的の駒を見失うかもしれない。

武器庫からありったけの爆薬を持ち出して

アメフをとつもない衝撃が襲った。

秘密基地の入り口でのことだった。彼は扉に叩き付けられ、転がった。体から血が吹き出るのが分かった。

撃たれた？

顔を上げる。

たくみな迷彩を施した兵士が視界をよぎった。うなりをあげて銃弾は飛んできた。

アメフは息を吐いた。だが、それでも彼は生きて秘密基地の中へと転がり込んだ。

日本兵？ もう来たのか？ 早過ぎる。

敵は哨戒していた一部隊だろう。アメフがゲーム中にとるに足りない存在だと放っておいたものの一部に違いない。

それがいまやカマクラ將軍の命で、そのアメフを処刑しようとしている。

アメフは壁に立てかけてあった短機関銃を引っ摺むと、秘密基地の入り口へ向けて連射した。突入してきた兵が一人、蜂の巣のように穴だらけになった。

アメフはきびすを返したが、もうまっすぐ立つことができなかつた。

彼の動いたあとには血が川のような跡を残した。これではいよいよ日本軍から逃げ切るのは難しい、とアメフはいまいましげに思った。

水晶盤の横ではソウが凍り付いていた。

こんな状況ではなんの役にも立たない発掘屋。

だが、こいつが生き延びれば、こいつはいつの日か解放派にとって価値のある物を掘り出すかもしれない。かすかな望みだ。

「ソウ、早く逃げる！」

「でも」

アメフはソウをつかむと、明かり取りの窓を覆う防弾ガラスを短機関銃の一連射で撃ち抜いた。そこへソウを押し込む。

小柄なこいつなら通れるはずだ。ソウが視界から消えると、アメフは苦勞して振り向きさらに発砲した。

敵が一人、あわてて物陰に隠れるのが見えた。

アメフは崩れるようにして水晶盤にもたれかかった。のろのろと弾倉を交換しながら、猛烈な寒さに気付いた。

樺太の寒さだった。

隙間風の入るノボシビルスクの自宅でさえ、今の寒さと比べれば

太陽から吹き寄せる風のような暑さだろう。

どうやら産まれてからずっと血管を流れていたヤークト人の血がほとんど流れ出てしまったようだ。

水晶盤の上では相変わらず灰色の駒が忙しく移動していた。はるか頭上から彼らを見下ろす巨大な人間の存在など気付いてもないように見えた。だが、もうそんなことはどうでもいいことだった。

どんなゲームにだって終わりはやってくる。

「ゲームオーバーだ」

アメフはつぶやくと一つだけ残っていた手榴弾のピンを抜き、水晶盤の黒い波面へとねじ込んだ。

ソウは地上へ這い出ることに成功した。水晶のように輝く、鋭利なガラスに傷つけられて手は血にまみれた。つまりながら立ち上がる。逃げなければならなかった。

森へ。

森の中へ。

ソウは荒野を駆け出した。地面は恐ろしくでこぼこしていた。背後で鋭い声が上がって、銃弾がソウをかすめる。

灼熱の鉛弾に追われ、ソウはかつてないほど速く走る。

そのとき、背後でくぐもった爆音が聞こえた。悲鳴や怒声がそれに続く。

だが、ソウには振り向く暇なんかなかった。ただひたすら走り続ける。眼前に広がる森へ向かって。

14 支配の民

ゲームは終わってしまふ。

テーブルの上の人形達はばたばたと倒れていった。そしてカマクラ將軍は力なく床へと崩れて、テーブルにもたれた。

「お見事です、將軍」

「……なぜだ？」

カマクラ將軍のしわがれた声は恐怖と怒りが半々だった。

「なぜわしは水晶盤を知っていた？　なぜわしは気付けば水晶盤の作ったゲームに参加していた？」

カマクラ將軍は立ち上がって、イズキ中佐を睨みつけた。だが、すぐに落ち着かなげに彼から目を離し、周囲を見回した。

そうやって、自分がいるのは操作されるための盤上ではなく、現実の世界であることを確認しようとした。

「答える、イズキ中佐！　おまえ達PCOはわしになにをした！」

「聞いて下さい、將軍」

イズキ中佐は言った。

「今世紀に入り歴史は加速を始めました。世界は探り終わられ、地図に空所はなくなり、世界規模のネットワークが産まれたことによって人類は自分たちの姿を確認することができました。」

しかし、同時にそのために、自分たちと異なる理念の人種の世界がどれほど多く存在するかに気付いてしまったのです。

いつ敵に回るとも分からない国々に囲まれているという恐怖から、列強を含めあらゆる集団の闘争が激化しています。今の世界は混沌としていて、我々PCOの力をもってしても未来を予測することができないほどです。

闘争により資源は浪費され、統一を目論んで起こされた第二次世界大戦も半島戦争も事態を複雑にしたただけでした。

我々が思うに、これは人類が新たな種へと分岐していくための

通過儀礼なのではないのでしょうか。

この果てしない試練が終わったとき、生き残った人種が統べる世界はこれまでの世界とはまったく違うものになるに違いありません」
イズキ中佐はよどみなく言葉を続ける。

「さて、我々PCOは人々によりよい世界を提供するために大昔に組織されました。我々は一人一人の人間に記された運命を読み取り、個々の人々に合った居場所を提供することができるのです。

今はまだ日本と台湾とベトナムしか我々は管理していませんが、我々は全世界をその管理下におく権利と義務を持っていると信じています。

我々が世界を統一すれば、それは他のいかなる集団が統一した世界よりも安定し、幸福な物であることは間違いありません。

このことは十分に理解して下さい」

カマクラ将軍はなにか言葉にならないうめき声を上げたが、イズキ中佐はかまわず続けた。

「水晶盤に関して言えば、六百年前に水晶盤を作った技術者達は敵対勢力に水晶盤を奪われた時のことを考え、恐怖に襲われました。そのために産み出されたのが水晶盤を撃破しうる運命を持った人種です。PCOは水晶盤が残っていることを知ったあと、この人種を蘇らせるためにあらゆる努力をせねばなりませんでした」

「撃破しうる……運命だと」

「水晶盤だけではありません。世界には大昔に埋められた技術が時限爆弾のように眠っています。それらが掘り起こされる度に新たな混沌が産まれるだろうことは間違いありません。PCOはなんとしてでもそれを押さえ込み続けねばならないのです。そのためには将軍を含め、多くの方のお力を借りせねば」

「見せる」

カマクラ将軍は苦しげな息の下から言った。

「全てを見せる！ わしが持たされた運命とはなんだ！？ 水晶盤の他に、わしはなにを持たされている！？」

「自分に課せられた運命を見るのは危険です。知るべきではない」とです。それでも見たいのですか？」

「見せろ、中佐！ わしは將軍だぞ！」

イズキ中佐はため息をついた。

「分かりました」

やがて悲痛な悲鳴が司令部をふるわせた。

樺太での仕事を終えたイズキ中佐は戦略室から出て、ゆっくりと扉を閉めると去っていった。

14 支配の民（後書き）

お読みいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2020j/>

水晶盤のゲーム

2010年10月8日15時02分発行